

唐代淨土教徒の精神生活

道 端 良 秀

一 序 言

支那に於ける淨土教は唐代を以て黄金期を現出せるものであり、其の隆盛なることは最頂點に達せるものと言つてよい。それは淨土教學の思想方面に就いて考へても、從來偶宗の立場に置かれ、尙淨土教としての眞義を發揮するを得なかつたものが、この時代の初めに於いて、道綽禪師が出で、引續き善導大師の出づるに及んで、遂に獨立大成するに至つたものである。彼の有名なる古今楷定の書と稱せらるゝ善導大師の『觀經疏』は正しく淨土教としての眞面目を發揮し、宗教としての指導原理を與へたものとして、唐代淨土教の王座を占むるものと言はねばならぬ。これに加ふるに大師の實踐窮行と、熱烈なる布教は遂に淨土教をして社會の宗教とし、一般大衆の生活力として、深く根據付けられたものであつた。

勿論唐代の淨土教が、單に道綽善導二師のみによつたものではなく、この二高僧を中心として、迦才、慈愍、懷感、法照、少康、飛錫、大行、道鏡等、其他多くの名僧知識が、各々教義の宣布に、實踐布教にその信する念佛の教を弘めて、愈々それが隆盛へと赴かしめたものであつた。

従つて前代迄表面に表れず、彌勒信仰に一籌を譲つて居たこの彌陀信仰は、俄然唐代に至つて活潑となり、遂に彌勒信仰者を遙かに凌駕するの狀態となつたことは、それが信仰の一形式とも見らるべき造像に於いて見るも、唐代に於ける阿彌陀佛の造像は、前代の統計とは逆に、斷然彌勒、釋迦其他の佛を引離して居ることに於いても、一應理解され得ることであらう。^①

更に又この時代に於ける淨土教の影響は、單なる思想界のみならず、それに伴つて、繪畫に、建築に、文學に、音樂に、總ての文化の上に現れ、以て唐代淨土教の隆盛を物語るものであり、又これによつて愈々社會人心に浸潤せる彌陀信仰の狀況を推察することが出來やう。

さてかゝる時に於いて、阿彌陀佛を信仰し、西方往生を願ふ人々、即ち西方願生者中には佛教専門家の僧尼は勿論のこと、上は王公貴族を初め、下は苛斂誅求のため故郷を捨て、流浪を餘儀なくする、貧苦の農民に迄及ぶが故に、これ等淨土教徒の精神生活と云つても一律に云々することは出來ぬ。僧尼には出家としての立場があり、王公貴族知識階級には又各々の立場があり、一般社會大衆にも亦以上のそれらと異つたる生活があるが故に、同じく淨土教徒の精神生活と云つても、これら各々の社會に従つてそれ／＼異つたる形式が現はれて居なければならぬと云ふことに注意せねばならぬであらう。

勿論その目的とする淨土往生に對しては、悉く同一であらうけれども、それが信仰内容とか、信仰生活とか、それが信仰の表現形式など、各階級の生活の差違と共に、當然それが異りを示して居ることは、到底否定することが出來ない。吾等は先づかゝる見地に立つて、唐代の淨土教徒がこの彌陀の信仰に就いて、如何なる考を有して居たか、如

何なる方法に於て彌陀淨土に往生せんと願つて居たか、それによつて如何なる方法が講ぜられたか、これらに就いて已下少しく論述の歩を進めてみようと思ふ。

① 松本文三郎博士論文「善導大師の傳記と其時代」參照……「善導大師の研究」(淨宗會發行)所收。

二 指導原理としての諸家の著述

先づ最初に淨土教徒としての僧尼に就いて眺めて見ると、二通りの系統に分たるやうである。即ち道綽、善導、迦才、法照、少康其他の如く、全く淨土教に專念し、彌陀を信じ西方を願ひ、これが往生を期すると共に、その熱烈なる信仰の現れは、一般大衆への彌陀宣布となり、不措身命の弘法となつて活躍せらるゝ人々と、身は他教に在り乍ら西方の往生を期する人々とである。

前者に於けるが如き高僧は、この時代淨土教の中心をなすものであり、其の著述は淨土教徒に對する指導原理となるものとして、重要な役割をなすものである。さて然らばかゝる重要な指導原理としての彼等の著述は、一體如何なることを教へて居るのか、如何なる方法に於いて淨土往生を説いて居るのか、かゝることは、淨土往生を目的とする淨土教徒に取つて最も重大事たるべきことであらねばならぬ。併し乍らこれは即ち從來多く研究されたる淨土教理史の研究であり、道綽善導其他の教學の研究に及ぶべきもので、こゝに於いてかゝる點に迄深く立入る餘猶を有しない。従つてこゝに於いては淨土願生者の最も關心事たる、淨土往生の行、即ち如何にして淨土に往生すべきか、彌陀淨土に往生すべき因となる行業は何であるか、如何なる方法に於いて西方に往生すべきや、かゝる點に於いてのみ

代表的なる諸師の説を檢討して、以てそれが影響を考察して見やう。

(一)道綽 さて今諸師の往生の行業を見るに當つて、こゝに斷つて置くべきことは、現在我が日本淨土教諸家に於いて、その解釋法に就いて多少の相違をなして居ることである。これは各宗の安心の上より來れるものであるが、今こゝに於いてはかゝることに關係することなく、史學の立場に於いて、力めてありのまゝに見て行き度いと思ふ。

道綽の主張する往生の行業は何か、それは師が著『安樂集』上下二卷に於いて示されて居る。この『安樂集』こそは師が末法思想に立脚し、『觀經』を中心として、末法時に於ける總て愚昧なる人々が、如何にして往生を得るかの方法論を示せるものとして、當時の人々に取つて最も歡迎されたものである。従つてこの書に於いて初めて往生への明かなる道が開かれたものと言ふべきであらう。即ち『觀經』は『大經』に對して衆生の、即ち吾々の往生の方法論を説けるものなるが故である。

さて道綽の往生の業たるや、一言にして言はゞ念佛三昧である。專心に念佛することゝに於いて往生を得るのである。この念佛とは師に従へば口稱念佛である。稱名念佛である。一切諸行に勝れた念佛によつて、一切の惡を轉じて淨土に往生することを得るのである。『安樂集』上下二卷、分つて十二大門はこれを高唱するものであるが、併し尙考ふべきことは、師の言ふ念佛たるや、果して稱名念佛のみなるや否や、又一切諸行を捨て、只念佛のみに専修せしめたるや否やと云ふことである。後世の研究者が如何にあらうとも、當時の人々は師が主張たるこの書を如何に見たるかである。而して彼等は道綽より如何なる影響を受けたるかである。

後に述ぶるが如く、道綽の直接の指導方法は、念佛の數量的功德であつた。所謂小豆念佛と言はるべきものである。

これらに於いて見る道綽の態度より、彼の書を見たる人々は、念佛が稱名念佛であつたことに論はないが、そこに尙觀念の念佛を認められ得ることは、觀經十六觀法を中心とせる著述に於いては、これ又當然と言はざるを得ない。當時の淨土教に多く觀佛を中心とする人々の見るのも又これらの影響によるものと見てもよからう。

又念佛は一切諸行中の要として、これを往生行業の第一とすゝめて居ることは勿論であるが、他の諸行に對しては何らこれを廢捨しては居ない。あらゆる總ての行業そのものも亦、往生の因たることを認め、これを廻向することゝに於いて、佛の願力によつて、悉く生ぜざるはなしと言ふ態度である。^①これは唐代の初期としては當然のことであり、これによつてこそ一般社會によく受入れられたものであらう。併し乍ら、彼が眞意とするところは、矢張念佛三昧であり、稱名念佛であつたことは、『安樂集』を精讀することに於いて知ることが出來やう。

(二)迦才 大體善導と同時代の先輩としての迦才は、道綽の影響を受け、彼が著『淨土論』三卷は、『安樂集』によることは、その自序によつて知ることが出來る。従つて彼の往生に就いての方法論も亦、道綽と大差ないものと見てよい。而してこの『淨土論』上卷第三項に、特に「定往生因」との項目の下に、これに對する彼が主張を掲げて居る。

今これを見るに、その行業は往生人の機根に従つてこれを二分類し、上根のひと、中根下根のひとの行業を擧げて居る。先づ上根の人の往生の行業は如何なるものかを見るに、これが因を二種となし、通因と別因となして居る。通因とは通じて十方淨土、過現未三世の淨土にも往生する因にして、それは『大經』下卷に述ぶる三輩段に於ける菩提心であり、『觀經』に説く世戒行の三福業であるとして居る。別因とは、別して西方淨土に往生する因であり、それには無量の因行があるが、要は只二種にして、一は所求、二は能求とし、所求に二、能求に六を擧げて居る。所求の二は

器世間清淨と衆生世間清淨とであるが、この所求、能求とは何を意味するか、これは所求、能求それ自體が直ちに往生の別因と云ふ意に非ずして、所求とは即ち求めらるゝもの、即ち往生の對象となるものと云ふ意味に解せられ、これに器世間清淨、即ち極樂淨土と、衆生世間清淨、即ち阿彌陀如來とを擧げて居るが故に、往生の因としては無量の行業あるも、要はこの二種の對象を離れては何らその意義をなすものではないと云ふことを明せるものである。従つて能求こそ正しく往生の因たるは、「能求者正是其因」と述べて居ることを以て知ることが出来る。

この別因の六種とは、念佛、禮拜、讚嘆、發願、觀察、廻向である。こゝに於ける念佛とは、佛の色身及び智身を念ずる心念と、口稱の念佛とである。

次に中下の根機たる人々に對する往生の業因として説かれたものに五種を出して居る。即ち懺悔、發菩提心、念佛、觀察、廻向である。念佛はこゝに於いても亦單なる稱名念佛ではなく心念も伴ひ、一道場に入り七日或は十日大小便食事を除ける以外は、睡眠を省いて、一心不亂念佛し、行滿ち後道場を出てたる後も行住坐臥即ち念佛するもので、念佛に於いても中々の苦行と云はねばならぬ。併しこれは當時として當然のことで、稱名正定業を高唱せる善導に於いてすら、矢張かゝる行業が説かれて居るのである。さて迦才はこの五種の行を述べ

「若能具前三種行者必得往生、幸勿疑也」と結んで居る。

かくして彼は道綽の後を繼いで往生の業として念佛を擧げ、更にその行業を、無量の行より五種乃至六種を取り出してこれを説明せることは確かに道綽の『安樂集』を整理せるものと言つてよいが、彼に於いて見る念佛なるものは、

勿論諸行の要をなすものであり、往生業の最勝たるべきものであるが、道綽の稱名念佛中心たんとする意圖の念佛を、却つて觀念中心とせるものゝやうである。

(三) 善導 支那淨土教の大成者たる善導に就いて、今こゝに詳述する必要はない。古今楷定の書として、淨土教に取つて最も重要な『觀經疏』を初め、其他多くの著述に現はれたる、彼の往生の行因とするものは、即ち安心、起行、作業の三である。^② 安心即ち至誠心、深心、廻向發願心の三心と、それによつて實踐さるべき起行即ち、讀誦、觀經、禮拜、稱名、讚嘆供養の五正行と、この五正行が相續する作業とである。而して正しく往生の實踐行たるべきものは五正行である。一切の行業を雜行と正行とに區別し、阿彌陀佛を對象として專念專修する以上の五ツの行を以て正しく淨土往生の行業と定めたものである。而して更にこの五正行中に於いても亦、正定業と助業、即ち正しく往生の業たるべきものと、それを助くべき業とに區別し、稱名念佛の一行を以て正定業とし、^③ 他の四行業をそれが助業となしたものである。^④ 従つて善導に於いては往生の定業は只稱名念佛一法であらねばならぬ。善導の念佛は飽く迄も稱名念佛であつた、假令觀念心念を説けるとしても、彼が弘むるところは、『觀經』下々品に於る十念の念佛であり、八十億劫の罪を滅する稱名の念佛である。上盡一形下至一聲の念佛に於いてよく最下の重罪人、正しく淨土に往生し得べしと述べたものである。^⑤

さてかくの如く善導は、道綽迦才等より數歩を進め、淨土教としての極地を現じ、只稱名念佛することに於いて易く往生すべしと説けるもので、かゝる簡易なる教は、假令この稱名念佛が、三心に裏付けられたるものであつたとは云へ、當時の一般庶民階級に取つて、如何に歡迎されたことであらうか。高遠なる教理も、幽玄なる教も、彼等無知

なる一般大衆に取つては、何等の價值も有しなかつた。かゝる時に於ける最も易き稱名念佛によつて光明の彼岸に到達さるゝと聞きたる人々は、如何に歡喜に燃えたであらう。希望の生活を送つたことであらうか。善導の功績實に偉大と言はねばならぬ。

さて然らば稱名正定業を強調せる善導は、それが助業、並びに一切の諸行に對して如何なる態度を取れるか、助業は正定業に非ざるも、正しく淨土往生に對する五正行である。されば助業は捨てらるべきものではなく、稱名と共に助業として行ぜらるべきものである。されば善導は何れの處に於いても、助業の廢捨さるべきものなることは一言もなく、却つてこの五正行を修すべきことをすゝめて居る。されば善導に於いては正定業たる稱名念佛すると共に、他の四行を助業として同様に修せらるべきものと見られる。^⑥これは後世の解釋が如何やうであらうとも、又善導の眞意が如何であらうとも、少くとも當時の人々はかくの如くにこれを理解したやうであることは、後に述ぶるが如く、多くの淨土教徒の修せる往生の行業を見ても、その一證左たり得るものである。

更に『觀念法門』『般舟讚』其他の著に見ゆる彼の念佛の行、讀誦の法、觀察の作法、行道の儀式等、更に一切諸行に對する彼の考へ方を見る時に、彼が念佛一法へと誘く方便としてか、總ての諸行を認め、これを彌陀に廻向すること^⑦に於いても往生を得ると述ぶるところ、又善導の眞意が那邊にあるやを考へねばならぬ。然し乍らこの雜行正行にしろ、專修雜修にしろ、正定業助業にしろ、起行、作業等、何處迄當時の人々が善導の眞意を汲み、彌陀の本願に乗ずべく修行したかと云ふことは、頗る興味ある問題で、かゝる見地に立てる研究が、この論考の目的なのである。

少くとも當時に於いては、今日日本の淨土教徒に云々せられて居るが如き、純粹なる態度に於いて、善導の眞義を

理解せるものではなく、念佛と共に他の正行を兼行し、又この念佛と云つても稱名念佛のみならず、觀念の念佛をも意味せるものであり、一切の諸行も念佛と共に效力あるものとして兼行して居たものと思はれる。従つて彼等には道綽も迦才も或は懷感も、慈愍も、法照も、飛錫もその往生の方法論に於いて殆んど一なるものと考へて居たものが多かったことと思はれる。こゝに教學そのものものと、當時の一般大衆を中心とせる信仰生活との相違がある。教役者の淨土教は、即ち専門家としての僧侶の淨土教は、必ずしも一般大衆の淨土教と同一なりと言ふことが出来ないのは、かゝる意味に於いてある。

(四)懷感 善導の弟子懷感の思想は、彼の『群疑論』七卷によつて知ることが出来る。彼は善導の弟子たるが故に、善導教義を繼承せることは勿論であるが、彼の淨土教に於ける態度は、師の純粹淨土教の立場より一步後退したかの感がある。師善導の下々品を對象とせる稱名正定業の救済論理を受け乍ら、法相の教理を以て淨土教義を解釋し、觀念中心の念佛を以て往生の業と説けるが如き、明かに一般大衆に對しての宗教ではなく、解學の淨土教と言はるべきものであらう。従つて彼のすゝむる往生の業因は、念佛を以て最勝となし、往生の要因たるべきものではあるが、その念佛は觀念が主であり、又念佛と共に諸行をも等しく往生の因として認むることは當然のことであつた。^⑧かゝる意味に於いて、彼によつて救済さるべきものは、知識階級であり、専門家であつて、無知文盲なる社會大衆に取つて餘り關係なきものであつたと見ることが出来るやう。

(五)慈愍 懷感と同時代の後輩たる慈愍には、所謂『慈悲集』其他の著述がある。法然によつて支那淨土教三流の一とせられたる慈愍の思想は、一言にして言へば、禪淨戒合修の淨土教である。従つて彼が唱ふる往生の業因なるもの

は、單なる念佛にのみよらざることは當然のこと、言はねばならぬ。彼が著たる『往生淨土集』(或は慈悲集)には、明かにこれが行業を述べて、稱名念佛と、『觀經』『小經』の讀誦と齋戒と、兼ねて「念觀世音」とであるとして居る。この稱名念佛と云つても只單なる稱名念佛ではなく、禪觀に對する念佛をも含めて居るものである。

又こゝには只『觀經』、『小經』のみの讀誦を舉げて居るが、彼の思想は一切の經教を佛所説としてこれを認め、讀誦大乘を以て成佛の因となし、一切の諸行は廻向することに於いて必ず往生すべしとの思想なるが故に、彼の往生の行業たる、善導の如く稱名念佛を以て萬行中の最勝、最要なるものと言ひ乍ら、尙且つ他の難行を承認し、これをすゝむるところに彼の特異性がある。

下々品に對する往生の行業は、明かに十聲稱佛であり、單なる念佛往生であるが、それは『觀經』に於ける下品下生の往生であつて、機根勝れたる上品上生の往生を願はんとするものは、かゝる方法に於いては不可にして『觀經』に説けるが如く如實に修行せざるべからずと云ふのが彼の眞意である、従つて彼の説くところ最勝、最易の念佛往生なりと雖も、彼が望むところは上品上生であり、一切の諸行を許し、念佛と共にこれを兼行して、以て往生の行とせんとするにあるのである。

従つて彼の著す『般舟三昧讚』の如き、全く善導の教義と軌を一にするものと共に、『往生淨土集』の如く、禪をすゝめ、戒を修し、總ての行業を許さんとする説あるは、何れも彼の述べんとするところのもので、何ら矛盾せざるものである。^⑨

(六)法照其他 以上唐代の初期中期に於ける淨土教家の代表四師の説を舉げたが、更に中唐以後に於いては、法照

少康、飛錫、善道、道鏡等の諸師が居る。法照の『五會法事讚』、飛錫の『念佛三昧寶王論』、善道・道鏡共集の『念佛鏡』、又傳記であるが、少康の『往生西方淨土瑞應刪傳』が各々現存して、諸師の主張を知ることが出来る。然し乍ら今こゝに諸師の主張を各々に就いて述ぶることは省略して、只彼等諸師の唱ふる往生の行業なるものは、何れも念佛三昧であり、稱名念佛をすゝむるものではあるが、又何れも他の一切の諸行を否定するものではなく、等しく念佛と共に兼行を許すものであり、善導の如き徹底せる思想を有せざるものであることを述ぶるに止めて置く。

以上の外、善導時代に於ける新羅の元曉の『遊心安樂道』、憬興の『連義述文贊』又は天台智者の著と云はる、『淨土十疑論』、慈恩の書と云はる『西方要決』等の如き、唐代淨土教に影響を及ぼせりと思はるゝ思想もあるが、これ又何れも上述諸師の説と大同小異にして、往生の行業に對して特別なる説をなして、一般社會を動かしたるが如きものはない。さて以上唐代に於ける淨土教の指導者としての諸師の説を管見し、それが往生に就いての方法論を見たものであるが、要するに、淨土教學を大成し、淨土教をして唐代社會の宗教として大いに弘布せしめた善導大師以外の諸師は、少くとも諸行を認め、これを許し念佛と共にこれを修せしめて居るものである。稱名正定業として念佛一法によれる善導に於いてすら、助業としての讀誦、觀察、禮拜、讚嘆供養をすゝめ、自からこれが實踐窮行をなし、日々三萬五萬の念佛、讀誦、或は行道、或は觀念に、寒中すら尙汗を出すの苦行をなして居るのを見て、當時に於ける淨土往生の行が如何なるものであつたか、如何なる行が伴つて居たものであつたかを知ることが出来るやう、従つて當時の淨土教徒が、これら諸師の教義を如何やうに理解せるか、彼等の了解する往生の業因は如何なるものであつたかは、以上に於いて推察することが出来るやう。

勿論これら諸師の著述が、淨土教徒の指導原理となつたことは當然であつたが、併しそれは専門家の僧尼階級であり、これを理解し得る知識階級であらねばならなかつた、一般大衆に取つての彼等の信仰は、彼等指導者の口よりの教化であり、身を以て示す實踐の教化によれるものであつた。従つて直接一般大衆に關係ありしものは、これらの著述ではなく、最も直感的な、最も簡易なる善導等の淨土變相・地獄變相の繪畫によれる教化であり、或は道綽の小豆念佛、又は法照の五會念佛たる、耳より來る音樂的なものによれる、教化であつた。これらのことは何れ後に於いて述べることにする。

① 其の一例を舉ぐれば上卷第三大門に云く

「言易行道者、謂以信佛因緣、願生淨土、起心立德、修諸行業、佛願力故、即便往生。」

下卷第十一大門第二に云く

「若能信佛因緣、願生淨土、所修行業、並皆廻向、命欲終時、佛自來迎、不于死王也。」

② 『往生禮讚』前序に「問曰、今欲勸人往生者、未知若爲、安心、起行、作業、定得往生彼國也」との問を起して、已下これに對して答ふ。

③ 『往生禮讚』後序、『觀念法門』攝生増上緣下、『玄義分』第六其他に於ける十八願加減の文、『散善義』流通分の「上來雖說」の文等。

④ 『散善義』深心釋下の就行立信の條。

⑤ 『往生禮讚』前序深心釋、後序等、善導の書にこの的確なる文多し。

⑥ 『法事讃』上卷序に云く

「棄此娑婆、忻生極樂、專稱名號、兼誦彌陀經、欲令識彼莊嚴、厭斯苦事、三因五念、畢命爲期、正助四修、則剎那無間、廻斯功業、普備含靈、壽盡乘臺、齊臨彼國。」

『觀念法門』明觀佛三昧法一の下に云く

「行者欲_レ生_二淨土_一、唯須_二持戒念佛誦_二彌陀經_一、日別十五遍、二年得_二一萬_一、日別三十遍一年一萬、日別念_二一萬遍佛_一、亦須依_レ時禮_二讚淨土莊嚴事_一、大須_二精進_一或得_二三萬六萬十萬_一者、皆是上品上生人、自餘功德盡廻_二往生_一と云ひ、第六證生増上緣にも同じく

「持戒念佛誦經禮讚、決定往生、以_二佛願力_一、盡得_二往生_一と云ひ、其他同類の文多し、此他『散善義』深心釋下の正助二業を修するの文、『往生禮讚』前序の四修の法を修し三心五念の行をなせば往生するの文等枚舉に違あらず。

⑦ 『般舟讚』より一例を出せば

「行往坐臥專念佛、一切善業併須廻、念々時中常懺悔、終時卽上_二金剛台_一と云ひ又

「萬行俱廻皆往生、念佛一行最爲_レ尊」とあり。

⑧ 『群疑論』卷一の第二明凡夫能生有相の二事理但生章。卷四の八專雜二修章、卷五の十多勸念佛章、卷七の十二事理念佛章、已下參照。

⑨ 慈悲のことに就いては一切拙稿「眞宗より見たる慈悲三藏」、『宗學研究』九、十、十一號に譲る。

⑩ 『觀念法門』、『佛祖統記』卷二七、「淨土立教志」に於ける彼の傳記等參照。

三 願生者に於ける行業の種々相

前節に於ける指導者諸師の教學が、直接西方願生者に取つて如何やうに受入れられたか。この西方願生者はあらゆる總ての階級に及んで居るが故に、それによつて種々異なる形式を備へ、それが行業に於いても亦多少の相違を來して居ることは當然である。佛教専門家の行業と、在俗とのそれ、知識階級と無學文盲の者、有閑階級のそれと、日夜

營々として片時の隙なき無産階級のそれ、都市に在る人々と農村片地の人々と、かく考へ來ればそれら階級境遇等に於いて何れも多少の相違あるを免れぬ。

さてこれらの人々の行業を知るには、先づ唐代より宋代に編纂されたる各種の往生傳、或は其他の靈驗傳、或は僧傳等によらねばならぬ。而して此種の各往生傳に記載されたる事實が、何れ迄眞を傳へて居るか否かは、尙充分の検討を要する問題であるけれども、こゝに於いては只彼等往生人の行業に就いての大略を知れば足り得るものである。尙これら往生傳には近時塚本善隆氏の研究によつて、從來不明とされて居た遼の非蜀の『隨願往生集』が、宋の戒珠の往生傳とされて、上中下三卷に抄出編纂され名古屋の眞福寺に藏せられて居ることが分り、この往生傳によつて從來の往生人傳に六十有餘人の新往生人を加ふることゝなつた。^①

さて今この眞福寺藏の往生傳を初めとして、迦才の『淨土論』、少康の『往生西方淨土瑞應刪傳』、戒珠の『淨土往生傳』、王古の『新修往生傳』、志磐の『佛祖統記』の『淨土立教志』、祿宏の『往生傳』などを中心として、これら往生人の行業を見ると、大體次の如き結果が現れて來る。

第一には大乘經典の讀誦によつて往生せんとする者、これは淨土の三經は勿論であるが、其他『法華經』、『金剛般若經』、『涅槃經』、『華嚴經』、『般若經』、等の經典が多く、例として智琰、朋濬、法曠、寶相、懷玉、尼淨眞、房翥、郗願、保等の人々が挙げられ、^②其中特に『觀經』、『小經』、『法華經』がその中心をなして居るやうである。『觀經』は唐代淨土教の中心思想であり、『小經』又四紙經とも稱せられ、讀誦に最も手頃であり、善導初め諸師がこの『小經』讀誦をすゝめて居ることは、^③一層これが普及に力を付したものである。『法華經』の讀誦が他の大乘經典に比して多いことは、

『法華經』が如何に社會に大なる影響を與へて居たものであるかの一證左であり、事實『法華經』は大乗經典中に於ける唯一の經典として、深く民間信仰に迄普及して居たもので、従つてこの『法華經』によつて、西方淨土に往生せんと願する人々の多かつたことも首肯し得る。

又次にはかゝる大乗經典の講述、受持、寫經、等による功德によつて往生せんとするもので、例として玄、詩、惠、誓、僧、衍、道、穗、善、誡、惠、忍、僧、僉、尼、妙、達、尼、法、諸、張、元、忠、等の人々を擧げることが出来る。^④

次は阿彌陀佛、或は觀音勢至等の佛像を造り、又はそれが繪像を畫きて以て、淨土往生せんとするもので、玄、明、僧、高、惠、鏡、迦、稱、道、詮、道、如、安、仁、遺、均、道、閻、常、惑、尼、僧、湛、太、原、沙、彌、などを掲げることが出来るが、更に金石文造像銘によれば、これに屬する無數の人々を擧げることが出来るであらう。この造像の目的は單に自身の往生ではなく、亡父母の爲とか、七生父母、祖先代々の冥福を祈るとか、更には國家安穩一族の幸福、來世の成佛を祈願するものであつた。

次には最も多い念佛及び觀佛に就いてである。淨土教であり、西方阿彌陀佛の淨土に往生せんと願する限りに於いて、念佛せざるが如き人々は皆無であらうし、念佛こそ西方願生者の缺くべからざる業因であらねばならぬ。従つて上述の行業も、念佛を前提としての上に於けるものであつて、念佛を全然無視して、只單なる經典、讀誦、寫經、造像と云ふが如きものではあり得ない。この場合に於ける念佛は、總ての場合を包含するもので、稱名念佛、觀想念佛、觀念、觀佛等に及ぶものである。心念に彌陀佛なくして彌陀の淨土に往生せんと願するが如きことはあり得ない。只念佛と他の行業が如何なる關係にありしか、その兼行のものが何れであるかに問題があるのである。上述の如き行業

を以て往生行となせる人々は多く、念佛を以て兼行とせるものであり、その中心行業は念佛以外のものにあつたやうである。念佛が兼行となり、第二義的となり、果ては表面に出されないやうな場合もあつたであらうけれども、全然念佛なき往生の行業でふことは、考へ得られない。さてこの念佛往生と云ふ中には、觀佛を中心とするもの、觀佛と口稱と並修するもの、口稱念佛のみによれるものがあり、又稱名念佛に於いても、一七七日百萬遍の念佛をなすもの、小豆を持つて數を量る小豆念佛をなすもの、大佛を見んとして高聲念佛をなすもの、十念々佛往生をなすもの、法照の影響を受けた五會流の念佛をなすもの等で、例へば、并州の道生は道綽に師事して一七七日百萬遍の念佛を修し、同じく道綽の弟子尼法智も亦七日間一萬遍の念佛を一心不亂に修し（以上福本往生傳）、又并州の女裴氏は小豆念佛十三石を稱へ（瑞應刪傳）、汝水の僧衍の妹孫氏は念佛五十七石を數へ、同じく汝水の沙彌尼空道は九十石を數へた。（福本往生傳） この小豆念佛は道綽の感化であり、凡そ晉陽太原汾水の三縣、悉く七歳以上念佛し、最下は一升より最上九十石に至ると言はれた。（續高僧傳二〇、迦才淨土論下、福本往生傳下、汝水沙彌尼傳） 百萬遍念佛も道綽の弟子關係に多く見出るゝもので、道綽の化導によるものである。『安樂集』には、かくの如き一七七日百萬遍念佛をすゝむる確たる明文はないが、彼が門下にすゝめて居たであらうことは、彼を受けて迦才はその著『淨土論』上に於いて、『小經』による一七七日百萬遍の念佛を以て往生の業となすことを説き、これは綽禪師の教によるものなることを述べて居るを以て見ても知ることが出来る。^⑥

高聲念佛はその根據を『大集經日藏分』によるもので、懷感は『群疑論』卷七に於いて、大念は大佛を見、小念は小佛を見ると言ふ經文は、大聲に稱佛することをすゝむるもので、須く聲を勵まして念佛すれば、念佛三昧成じ易しと述べて居るところのもので、これが例に入るものに福水勝の人道如があり、道綽の弟子道暉があり、太原の人白樂天の從兄

弟、童子樂藏があり、同じく太原の人、尼淨珪がある。(何れも福本往生傳)淨珪の如きは大聲唱名の時は丈六の化身を見、小聲唱名の時は小なる化身を見たと言はれて居る。十念往生は『觀經』下々品の臨終十念往生の文によれるもので、長安の屠殺業をせる張善和(淨土立教志)、分州に於ける同じく屠殺業者某(瑞應刪傳)などそれで、これは何れも下品下生の代表的なるものを挙げたものらしく、惡逆の人も十念の念佛によつて往生せることを示せるもので、淨土教救済原理の徹底せるものである。これは善導等の教化の然らしむるところと思はれる。十念往生が相當民間に弘まつて居たと思はれることは、唐の成都尹韋臯の「河東鸚鵡舍利塔記」(樂邦文類三)によれば、河東の裴氏自家の鸚鵡に念佛を教へ、死す時十念念佛して死す、荼毘して舍利十粒を得たが故に、高僧慧觀これを聞き、遂に舍利塔を建つと云ふことを述べて居る。鸚鵡が念佛を稱へたと云ふことに於いて、それは何ら不思議なことでもなく、只こゝで注意すべきは、鸚鵡に十念の念佛を教へたと云ふことである。この地方に於ける淨土信仰、十念往生のこと、禽獸に迄念佛を教へしむる位に相當弘まつて居たであらうと云ふことである。尙又、長安の李知遙は五會流の念佛をなして居る(佛祖統紀二九)。

次には觀法、觀察、觀佛によつて往生せんとするもの。道綽の弟子道暉は日想觀を修し、幽州の道喙は地想觀を修し、營州の僧念は佛の依正二報を觀じ、相州の道鏡は念佛三昧し、印佛觀想し、同州の玄運、并州の顗品、陝州の法瑾、泗州の善豐等は何れも阿彌陀佛像を觀じ、或は并州の觀操は阿彌陀の三字を感じ、弘猛は觀音を觀じ、僧弼は盲人なれども白紙を佛と觀じ、(何れも福本往生傳)何れも往生を得て居る。觀法の如きは佛教に通ぜる行業にて、それを以て往生の行業となさんとすることは當然で、特に『觀經』に十六觀法を説き、善導を初め諸師又懇切にこれが指導原理を示

せるに於いてをやである。

次には禮拜、讚嘆供養、懺悔、等によつて往生せんとするもの。并州の僧、街（或は僧衍）は道綽に従つて日夜禮拜一千遍、念佛八百萬遍と云ひ、（宋高僧傳二四）、彼の北周廢佛の立役者衛元嵩の孫、元志も亦禮拜によつて往生せんとし、德州の道昂は燒香供養し念佛を修し、道綽の弟子僧昇は、妙花を供養し、花座觀を修して往生し、常州の尼、空忍は、四時妙花を採り諸寺佛像に供養すること二十餘年、以て往生し、并州の孫宣氏婦も亦供花によつて往生し、善導の弟子道詮は專心禮懺九十日、兼ねて念佛して往生し（何れも福本往生傳）觀察使韋之晋は、西方道場を建て、懺悔願生し、并州の岸禪師は毎に方等懺を行じて往生した（已上瑞應刪傳）。而してこれは總て念佛觀佛を伴ふものであつて、禮拜、讚嘆、行道等が單獨に行はれたものではない。已上は善導教義に従へば、五正行にして、稱名正定業と助業としての讀誦、觀察、禮拜、讚嘆を舉げたもので、善導教義の如く正助を區別して、稱名を中心とせるものもあるが、多くは五正行は同等の價值に於いて、并修せるものが多かつたと見ねばならぬ。即ち念佛と讀誦、念佛と觀察と云ふが如くであつて、それが助業に中心を置けるものも多く上述の如きはその傾向を示して居るものである。例へばそれが具體的な一つを已上の中より示すならば、正助二業を分別し、稱名正定業を立て、純粹淨土教義を主張せる善導の弟子に於いて、上述の道詮なる者、師より往生の業として、六時禮懺を授かり、道場に入り九十日の間專心禮懺し兼ねて念佛を修したが、夢に於いて西方に向ふ二道を見、一は險路であり、一は平道なるが、一沙門の説明に、只念佛して懺法を修せざる者は險路、念佛懺悔、兼ね修する者は直路なり、汝は念佛懺悔兼ねる故平道なりと示され、それによつて往生せることを記して居る。これは何を物語つて居るか、稱名正定業の主張者善導の門下にかゝる考の異端者の存在せること

は、善導の教がかくの如く解され、兼行が修せられて居たことを示すもので、これによつて當時一般の往生の行業の全般を推察することが出来るものである。善導の眞意が如何であらうとも、これを了解する人々は正助兼行が中心であり、念佛のみを以ては尙高尚なる上品中品の往生は不可能と考へて居たものである。これに加ふるに、善導以外の指導者諸師の行業のすゝめは、悉く兼行あるに於いてをやである。

尙この他往生の行業として、念佛と共に修せられて居るもの無数であつて、それらは何れも『觀經』に於ける九品往生の行業によれるものが多く、中には橋梁を造り、渡船業をなし、道路を造り、更には捨身して以て往生せんとするが如き人々もあつたやうである。^⑦

以上は唐を中心として、多少宋代に迄及べる往生人の往生の行業の種々相を、二三の例を出して以て全般を見たものであるが、これによつて知り得ることは、彼等往生人は單なる念佛のみによつて、ましてや單なる稱名念佛のみによつて往生せんとするが如きことは殆んどなく、何れも念佛と共に他の多くの行業を修せんとせるものである。以上に舉げた例は、それが主とせる行業に就いてのみ出せるもので、彼等往生人は單に一つの行業ではなく、力めて多くの行を積み、以て大功徳を廻向して上品中品の往生を遂げんと願せるものであつた。勿論稱名にのみよれる往生、十念往生の如きもあれど、それは何れも下品往生にして、一般願生者の願はざるところのものである。念佛と共に兼行こそ最も功徳大となされて居た。これは前節に述べたる、指導者諸師の指示せる往生の行業と對應せるものである。

① 『東方學報』京都第七冊に「日本に遺存せる遼文學と其の影響」として發表された。尙この項の論究に就いては主としてこの眞福寺藏の戒珠往生傳によつたものであるが、塚本氏が苦心して筆寫せられし貴重なる此書を心よく貸與せられたことに對してこ

ゝに深く感謝を表する。已後この書を略して福本往生傳とせり。

- ② 智琰(續高僧傳十四)は誦法華經三千、講涅槃法華維摩三十、講觀經一百一十と云はれ、明游(續高僧傳二五)は金剛般若經を、法囋(同二七)は大經を、寶相(同二八)は、毎夜小經を誦七遍、念佛六萬遍、專讀涅槃一千八十遍、兼れて金剛般若を讀誦し、懷玉(宋高僧傳二四)は一日念佛五萬、小經を誦する三十萬と云ひ、尼淨、眞は金剛般若を(漢家類聚往生傳)、房翥は一萬遍の金剛經を、邵願、保は小經を誦して居るのが見える(瑞應刪傳)

- ③ 善導の五正行の一は三經の讀誦であり、諸所に明證の文あるが、特に『觀念法門』定善觀下には、小經讀誦日別十五遍或は三十遍と云ひ、更に護念増上緣下には十五遍二十、三十遍已上、或は四五十百遍已上十萬遍に及ぶと述ぶ。

- ④ 玄奘は講法華經百返と云ひ、惠旉は講般若經二十餘返、又大品經を講じ、僧衍は法華經を講じ(法華傳五)、道穗は大經を受持し、善諤は觀經を受持し、惠忍は尊勝陀羅經を、僧倫は阿含經を、尼妙達は法華經を、尼法諸は法華經を、張元忠は大經其他を寫經し(何れも福本往生傳)各々受持することに於いて往生せんとして居る。寫經によれる行業は善導を初め諸師のすゝむるところである。

- ⑤ 已上は何れも眞福寺藏の往生傳に出て、他書にも出て居るが造像、畫像のことは、今煩しく一々記述せず。何れもその一例を出したに過ぎないものであつて、只これ等の傾向を知ればよいのである。

- ⑥ 『浮土論』上第三に云く

「若人念阿彌陀佛、得百萬遍已去、決定得生極樂世界、純禪師檢得此經、若能七日專心念佛、即得百萬遍也、由此義故、經中多尊七日念佛也」

と云ひ、又卷下第九に次の如く述べて居る。

「問曰、經雖說七日念佛、即得往生、未知念幾許佛名得往生也」

答曰、如純禪師、檢得經文、但能念佛一心不亂、得百萬遍已去者、定得往生。又純禪師依小阿彌陀經七日念佛、檢

得百萬遍」也。是故大集經、藥師經、小阿彌陀經、皆勸七日念佛者此意明矣。」

⑦ 潤州の曇融は生死海を渡す阿彌陀四十八願橋を常に觀じて遂に三十餘州中に橋梁をかけること四十八所に及び、その功德にて往生し、蒲州の明度は彌陀四十八願は生死の愚夫を渡す船舶なりとて、自からそれが船渡業をなして往生し、大行縣の善晟は

大行縣の難路を長年を経て岩石を碎し平けて平路とす。(何れも福本往生傳)

四 往生人の信仰内容

西方願生者の往生の行業が、前述の如く念佛を初めあらゆる行業を修して、以てそれが目的を達せんとするものであつたが、さてかくの如く種々なる行業によりんとする彼等の信仰内容は如何なるものであつたのか、彌陀淨土に對する信仰がどの程度に迄徹底されて居たのであるか、西方を願生する淨土教徒としての信仰は、果して純粹なるものであつたか否か。

先づ第一に擧げねばならぬことは、彼等の抱懷する彌陀の淨土と、彌勒の淨土との關係に於いてである。この兩者は明かに區別されて居るもので、一は西方阿彌陀佛の安養淨土であり、一は兜率天に於ける彌勒の淨土である。一は三界を越え迷界を脱した悟の世界であり、一は三界の内、當來成佛すべき彌勒の國である。一は淨土經典により西方往生であり、一は彌勒經典により兜率上生である。而してその救濟さるべき對象は一は彌陀佛であり、一は彌勒佛であり、明かに劃然たる區別をなして居るものである。

かくの如き當然なるべき兩者の關係が、唐代淨土往生者の中に於いて、尙確然たる區別なく、漫然と兩者を混同し

て居るが如き人々を見出すが如きは、これら往生人の信仰が如何なる程度のものなるか、略々想像し得られるやうである。

例へば相州(河南省彰德)の道昂(貞觀七年七月卒)は、彼の靈祐の弟子であるが、華嚴地論を講じて常に安養に生ぜんことを願つて居たが、臨終に於いて天衆音樂空中より聞え、正しく兜率天の下迎と見えたが、時に昂は衆に告げて、「天道は乃ち生死の根本なり、願するところに非ず、常に淨土を祈る、如何にして此に従はざらんや」と言ひ終れば、即ち天樂上騰して暫くにして遠く滅し、その代りに西方より香花伎樂充滿し、團雲の如く飛涌して來て、頂上に施環するを見る。昂云く、西方の靈相來迎すと、言ひ訖つて高座に端坐して卒すと云ふ。(續高僧傳二〇) これと同じことが、隋代ではあるが、并州の壽洪なるもの、一心に三寶を供養し、常に西方を念じたるに、臨終に兜率天上の天男天女來迎して、遂に法師に近づき、袈裟を執り天に上らんとす、法師責めて云く、吾は彼處を期せずと、肯て從去せず、傍にある徒衆彌陀佛を念するに、忽ち西方淨土の化佛菩薩來迎して以て壽終ると云ふ。(迦才淨土論)

さてかくの如き物語りは一體如何なることを示して居るものであるか。何れも佛教專門家たる出家であり乍ら常に西方往生を念じ乍ら臨終に於いて兜率の迎を受け、大いに驚きて弟子をして念佛を稱へしめたり、自ら大聲叱咤するが如きは、これ明かに彼等の彌陀信仰と彌勒信仰とに對する混線を意味して居るものであらう。或はこの物語編者の意圖するところは、彌勒と彌陀とを比較して、以て西方往生の勝れたることを示さんとするものであるかも知れぬが、編者の意趣が那邊に存在しやうとも、これは正しく兩者混同し、兩者信仰の不純を暴露せるものに外ならぬ。これによつて、兜率上生に對する行業も、西方彌陀往生に對する行業も、彼等に取つては同一なものであつたことを示して

居る。只その安心が何れの佛に向つて居るかの區別にして、行業に於いては全く同一であつたものである。それのみならずこの例に於いては、この安心も亦最後迄不徹底であつたものゝやうで、それが爲に、臨終に於いて兜率の下迎に會つたり、西方化佛の迎を請ふたりしたものであらう。

而してかゝる例は一二の特殊なもので、他の一般を云々することを得なければ幸ひであるが、遺憾乍ら唐代に於いても、尙かゝる不純なものありしことは否定出来ないやうである。

一體かゝる兩者の不純的な信仰は、六朝時代の信仰界に著しいもので、當代に於ける彌陀信仰と稱するものを見るに、全く彌勒信仰と同一なりと考へて居たやうである。これらの事實は造像銘によつて知ることが出来るもので、その一例を擧ぐれば、北魏の太和二十三年の彌勒造像銘に、彌勒石像一區を造つて、西方無量壽佛國に生じ、彌勒の三會說法に會ひ、下つて人間王侯の子孫に生れ、大菩薩と同じく一處に生ぜんことを、一切衆生と共に、普く斯福を同じくせん、と云ふものがある。^①全く彌勒も彌陀も、兜率も西方淨土も、悉く一のものであり、總ての願が達せられると考へて居るもので、その信仰意識たるや全く漠然たるものであつた。かくの如き例は尙多くの金石文の示すところであるが、かゝる造像銘は流石に唐代淨土教隆盛の時に於いては、殆んど發見し得ないやうにも思はるゝけれども、果して信仰内容が何れ迄純化されたるや否や。

時代の經るに従つて佛教の知識も普遍化され、その信仰も次第に純化されるものであらうが、唐代に於ける道綽の『安樂集』、迦才の『淨土論』を初め、懷感の『群疑論』、元曉の『遊心安樂道』、道鏡善道の『念佛鏡』それに天台著と云はるゝ『淨土十疑論』、慈恩大師の著と云はるゝ『西方要決』等、悉く兜率上生と西方往生との優劣論を戦し、以て彌陀

西方往生の勝れたることを論定して居ることは、何を物語つて居るであらうか。これ明かに唐代に於いて尙、彌勒信仰が盛んであり、兜率上生が彌陀信仰に對する勁敵であつたことを示せるものに外ならぬ。と同時に又當時の彌陀信仰そのものに對する、彌勒信仰との混同を防ぐものであつたと見られ得るであらう。南北朝以來漠然たる兩者の信仰が唐代諸師のかゝる優劣論によつて大いに改まつたことであらう、それによつて又漠然たる彌勒信仰者が、彌陀西方願生者に轉向せることもあつたであらうことは、唐代造像の上に於いて、唐代以前彌勒造像の優勢が、唐代に於いては全くその位置を顛倒し、斷然彌陀像が多くなつたことに於いても、その一例を示せるものであらう。^②

併し乍ら南北朝に於ける上述の如き著しき兩者混同の信仰が、果して悉く純粹なる淨土信仰になつたと考へ得られない、假令南北朝の如き極端なる混同はなかつたとしても、尙上述に示すが如き、兩者混線の不純なる信仰内容を有せる者があつたであらうことは、否定し去ることは出来ない。

これに加ふるに、指導者諸師に於いて淨土教徒にして往生人たる、新羅の元曉、憬興、更に慧淨が、念佛をすゝめ各々それに對する著を出しつゝ、一方に於いて彌勒經典の注疏をなし、又兜率上生せる慈恩大師が多くの彌陀經の注疏をなし、念佛をすゝむるが如きことは、一層一般の人々に兩者混同の風を與へたものではなからうか。彼の有名な白樂天が、彌勒信仰者であり、又同時に彌陀願生者となつたことなども、唐代に於ける兩者の關係を物語る一例である。^④

尙又其例を、今大村西崖氏の『支那美術史雕塑篇』に收められたる造像銘にのみよつてこれを眺めて見ても、彼等の信仰の中に彌勒と彌陀との判然たる區別を認めて居たか否かを疑はしむるものがある。

一體造像銘などの書式は大體に於いて一定して居るためであるかどうか、その邊の研究も亦充分せねばならぬが、造像の目的を見ると、それが彌勒であらうと、釋迦であらうと、彌陀であらうと觀音であらうと殆んど一樣であるやうである。龍門の石窟像銘を見ると、何れも「七世父母法界衆生の爲」であり、等しく群生を拯い、同じく彼岸に登らんことを期するものである。特に儀鳳三年七月十七日の季萬通及び妻徐合家等の敬造せる彌勒像一軀と、儀鳳三年七月三十日李思妻孫の敬造せる彌陀像一軀とは、その目的、所願など殆んど一にして、その銘文迄よく似て居る。前者は

「上爲天皇天后 又爲亡父見存母實及七祖先靈存亡眷屬 法界蒼生俱登正覺、」
と云ひ、後者は

奉爲天皇天后 及爲云父之男行敦、又七代 師僧父母蒼生、得登正覺

と言ふが如き、その文の起草者が同一人なるか、かゝる一定の形式なる故か、何れにしても何らそこに區別がない。又彌勒像を造つて淨土に往生し以て苦を脱せんと云ふが如き銘文も多くあるが、これらは何れも西方淨土に往生せんとするものではあるまいか。かく考ふると唐代に於ける兩者混同の思想は、尙相當多くの人々に抱かれたる、素朴的なる信仰であつたものを考へ得られる。

尙この例は往生の所期の目的に對する漠然たる信仰を有せるものであるが、次に西方往生阿彌陀佛國を目的として、確たる安心を有せる願生者の信仰内容を見るに、信仰形式を數量的に表現せんとするものがある。即ち小豆念佛と稱

するものこれである。この事實は已に上に述べた如く、主として道綽によつて、始められたもので、念佛一聲つゝ、小豆を以て計量し、念佛何升何石と稱して、その信仰の厚薄を云々するパロメーターとなすものである。眞福寺藏の戒珠『往生傳』卷下汶水沙彌尼空道の傳によれば、七歳より念佛して八十七歳迄に九十石に及んだと云ひ、更に晋陽太原汾水三縣は七歳已上念佛し、精進なるもの九十石八十石七十石、中なるもの六十石五十石四十石、下なるもの三十石二十石、乃至五石三石であり、最下なるもの一升已上であると云つて居る。

かゝる念佛の數計的計算、信仰の量的評價たる小豆念佛が、支那全土の如何なる地方に迄及んで居たか、今俄かに知るを得ないが、その中心は山西省の太原地方であつて、それより漸次地方に普及されたであらうことは想像し得られる。尙この小豆念佛に非ざるも念佛の量的表現、信仰の數的形式が行はれて居たことは、これ又唐代淨土教のみならず各時代にも多く行はれて居たことである。即ち日課何萬遍の念佛を稱ふると稱する、各往生人の傳記に示せるそれである。^⑤

次に彼等は『觀經』に説ける九品の淨土往生を信じて、各々自分の力に應ぜる淨土に往生せんとして居ることである。従つて各人の往生の行業も、かゝる信仰の相違によつて各々異つて來なければならぬ。往生するからに於いては高尚なる上品、中品の淨土に往生せんとするは自然の理にして、従つてその行業も單なる念佛を稱ふるは下品と貶して、他の諸種の行を修し以て念佛と共に、上中品の淨土に往生せんとせるものである。各往生人の傳記に見ゆる種々なる行の并修は、かゝる信仰によるものなるべく、上述の善導の弟子道詮の念佛懺悔兼行せるを以て淨土の平道を進んだと云ふ説話は、これらの消息を最もよく示せるものと言つてよい。

尙かゝる信仰によつて九品の各淨土に往生せる人々を求むると、尼眞資の師は上品上生に往生し、眞資も亦師の夢の教によつて法華、金剛般若等の大乘經を讀誦し十善を持して上品上生に往生せんとし（漢家類聚、廣州（廣東省）の尼往生傳）、善惠は齋戒し般若三昧を行じて上品中生の淨土に往生し（福本の往生傳）、長安の尼淨眞は乞食し、一生無瞋、金剛經を講ずること十萬遍、專精念佛して上品の往生を遂げ（瑞應刪傳）、太原の沙彌は衍禪師に従ひ、佛像を畫きて上品上生に往生し（福本の往生傳）、洛陽の尼悟性は念佛萬遍、台山に入つたが遂に中品上生に往生し（瑞應刪傳）、雁門（山西省五台山附近）の智緣は晝夜三時に三品生の觀を成じて中品下生に往生し、釋法敬は下品上生に往生したことが見える（已上福本、又の往生傳）、又眞福寺藏の往生傳及び漢家類聚傳の道鏡傳には、極樂には九品ありて、上品は必ず三福を具し、中品下品は或は一つ或は二つ、或は少分具して往生するとの佛の夢告を得たことを傳へて居る。これらは當時淨土教徒の往生觀にして、上品を以て理想としたことは當然のことであらう。

善導が下品の衆生に對して、稱名によれる最も易き往生をすゝむる側ら、尙齋戒觀察或は『小經』讀誦何萬遍、日課念佛何萬遍をすゝめて、上品往生をも認むるが如き觀を與へたることを初め、慈愍の上品上生のすゝめ等、其他諸師の上根の人々に對する行業としてすゝむるものは、明かに『觀經』の上品上生往生に對するものであることは否定することは出来ない。

而して彼等往生人の共通して願ふことは、往生の驗として、臨終來迎往生であり見佛往生である。臨終に至つて西方より紫雲たなびき、技樂と共に化佛菩薩の來迎を見んとするは、彼等往生人の信仰の極地である。これあるによつて往生の可否を定めんとするものでもあつた。従つて往生人の傳記は必ず臨終の來迎其他の奇瑞を以て飾られて居る。

これ彼等の信仰が來迎往生、見佛往生なる所以である。

- ① 松本文三郎博士論文「六朝時代の彫像題銘より見たる淨土思想」、『支那佛教遺物』所收（參照、尙この研究には多くの例を出せり）。

- ② 松本文三郎博士論文「善導大師の傳記と其時代」參照（淨宗會發行の『善導大師の研究』所收）。

- ③ 憬興著『彌勒上生經疏』二卷、元曉著『彌勒經疏』三卷、『彌勒經宗要』一卷、慧淨著『彌勒成佛經疏』一卷があり、一方慈恩には『阿彌陀經疏』一卷及び『西方要決』等がある。

- ④ 『白香山集』六十一に「畫彌勒上生幀讚並序」、「繡西方幀讚並序」及『佛祖統記』卷二十九、卷四十二等參照。

- ⑤ 例を舉げると、並州の尼妙安は日に六萬遍と云ひ、同上并州の道宗は一萬より百萬遍と云ひ（福本の往生傳）又上述の一七日百萬遍の念佛等これである。

五 貴族及び庶民階級の信仰

唐代の佛教は貴族佛教であると云ふことは、從來言はれて來て居ることである。事實その通りで、唐代國家社會が、彼等の支配下に統率され、封建國家社會を形成せる時、彼等の勢力は又大なるもので、その下に於ける佛教は當然彼等に支配され、彼等の自由となり、彼等によつて維持されて居たものである。今『唐會要』、『長安志』、『唐兩京城坊考』などによつて長安城内にある百有餘の寺院を見ても、それらの殆んどは彼等貴族並びに顯官等の支配階級の手によつて建立されたものであり、彼等によつて支持されて居るものである。又地方の寺院に於いても等しく、此等地方の豪族支配階級の經營になるものが多い。

この貴族富豪等と寺院との交渉に於いては、種々なる原因によるもので、單なる表面的なる精神生活に於けるものではなく、そのよつて來るところは多く經濟生活であるところに注意せねばならぬ。寺院それ自身も亦、寺院經濟の立場より進んで貴族及び權力者に接近せるものであつて、寺院は正しく貴族と等しく、又大富豪であり、大地主でもあつたのである。この方面のことは今の所論に非ざるが故に略するが、かゝる貴族と寺院との接近は、表面的には貴族及び支配者の精神生活を飾るものであつた。これは一つは彼等の地位に於ける特權であり、又彼等の被支配者に對する虛榮であり、又彼等自身の娛樂趣味でもあつたものであらう。従つて寺を建て、像を造り、大法會、或は齋會等を設くるは、己れの富と權力を誇示すると共に、自己満足の姿でもあつた。況んやそれによつて佛への功德となり、死後の幸福と、現世の壽福を得るに於いてをやである。

かゝる狀勢下に於ける淨土教も亦これが軌を一にするものと言ふことが出來やう。併し乍ら彼等に於ける信仰生活が幾多の不純性を含んで居るものであるとは云へ、尙これが信仰に熱心なる人々もあつたことを認めねばならぬ。唐中期代宗項の彼の飛錫の宮中方面に於ける淨土教の普及、及び法照禪師の五會流念佛の流行は、^①かゝる人々に相當深く信仰せしむるに至つたことであらう。圓仁の『入唐求法巡禮行記』卷三に、時の朝廷より長安城内の諸寺に勅して、阿彌陀淨土念佛教を傳へしめ、諸寺を巡廻し、毎寺三日となし、毎月巡輪して絶えざらしめたと云ふことは、宮中貴族方面に於ける、淨土信仰が相當強い勢を示して居たことを示すものであらう。

然らば次に一般庶民階級に於ける淨土教は如何なる狀態であらうか。元來淨土念佛の教は、其の救濟さるべき對象は、機根劣れる五逆十罪の人々である。正法既に亡び、像法も亦去り、今や末法五濁の世界となり、鬭諍の世界、虛偽

の世界、かゝる時代に生れて、宗教的救済の途の絶えたる人々、かゝる人々こそ彌陀教出現の意義を認めねばならなかつたのである。

一般庶民階級に取つては、特に無知盲昧なる人々に取つては、高遠なる救済論理も、幽玄なる成佛の哲學も、全く路傍の一塊にも價しなかつたであらう。彼等にとつて最も直接的なるものは、最も簡易にして、最も功德大なるものを求めんとするものであつた。現在の壽福を求むると共に、未來の幸福をも得んとする、功利的なる思想の所有者が多かつたことであらう。これ彌陀教の隆盛となる一つの原因と云へやう。

かゝる民衆に取つて最も感動せしめられ、深き感銘を與へたるは、道綽善導其他の稱名念佛の教化もさること乍ら、耳より來る教化よりも、直接感情に訴へんとする、淨土變相・地獄變相の繪畫であらう。無知なる人々は理論的ではなく、直接まぎ／＼と眼前に己れの姿を見出したる時、恐怖と感喜との交錯は、直ちに彌陀信仰への直接動機となつたことであらう。この點に於いて善導大師の淨土變相作成の功績は、一般民間の彌陀信仰に取つて、大師の古今楷定の書たる『觀經疏』に勝れること幾倍であらうか。

尙かゝる佛畫は當時非常に流行し、淨土變相・地獄變相の如きも、唐代唯一の畫家たる吳道玄を初めとして、李思訓、閻立本、閻立德、趙武端、張孝師其他の知名の畫家によつて、各寺院の廻廊を初め、各壁間に畫き出されたことは、人々に如何なる思想を與へたことか。地獄變相の前に立ちては、慄然として膚に粟を生ぜしめ、己れの罪業の深きを自覺し、淨土變相の前に立ちては極樂莊嚴の莊嚴さに恍惚となり、彌陀淨土の憧れとなり、西方願生への一歩となつたことは、これ又當然のことであらう。^③加ふるに善導を初めとして、多くの指導者諸師の熱心なる弘法は、これ

に拍車をかけたものであらう。^④

而してこれら淨土教徒の精神生活の一として、念佛結社を擧げることが出来る。これは遠く東晋慧遠の白蓮社にその源を發するもので、慧遠の歿後永くその後を絶つて居たものであつたが、唐代淨土教の勃興と共に、唐代中葉より次第に盛んとなり、次の宋代に至つて非常なる發展を來したものであつた。唐代に於けるものとしては、蘇州（江蘇省）武丘山の智琰（五六四—六三四）は、州の内外の僧俗五百許人を毎月一度集めて、齋を設け、講觀をなすこと十餘載と云ひ（續高僧傳十四）、吳郡の人（江蘇省）神皓（七一六—七九〇）は、西方社を結んで道俗を集め（宋高僧傳十五）、彭州丹景山（四川省）の知玄（八一〇—八八二）は長安に於いて楊州刑部汝士高、左丞元裕、長安楊魯士等と蓮社を結び（宋高僧傳六）、江州（江西省九江）、興果寺の神湊は菩提香火社を造り（宋高僧傳十六）、彼の白樂天も亦東都興善寺如滿と共に香火社を結んで居たやうである。（白香山集六十二）

これ等は何れも僧俗が集つて、共に西方往生を期するものであるが、今此等結社の人々は如何なる階級に屬して居たか、全く庶民階級の集會であつたかどうか。上述の記載に於いてはこれが解答を與ふる鍵はないが、知玄の蓮社には汝士高、元裕、楊魯士等の知名な士があり、智琰の結社は三福の行業、諸の觀想を修すと云はれ、神皓も亦知名の在俗の弟子多きことより、更に神湊、白樂天の如きも何れも大官貴族の交游ありし人々なることより見て、これら多くの結社には、大官貴族等も加はり、他の一般知識階級を集めたものらしく、所謂一般庶民階級の參加は餘りなかつたのではなからうかと思はれる。併し何れにしてもかゝる集りは、淨土教徒の精神生活上重要なものであつたことに間違ひはない。

然らば一體庶民階級と云はるゝもの、特に農村を中心とせる地方農民のこれに對する宗教生活はどうであつたであらうか。一體支那に於いて農民に對して如何程の文化的施設が與へられて居たであらうか、支那に於いては農民は社會大衆の外に置かれて居たものではあるまいか、對象とされ得る時は只、納税と庸役とのみではなかつたらうか。貴族、富豪、官吏等に取つては、農民は全くの奴隸であり、財産であり、財を絞り取る一つの物でしかなかつたであらう。彼の農民を中心とせるが如き、均田法に於いてすら、それは從來の貴族富豪に對する土地私有の認定と、今後の兼併防止によるもので、一般農民に於いては、規定の百畝はおろか、それが五分の二かそれ以下が實際の給田であつた。^⑥この傾向は彼の安史の亂以後特に著しく、農民の窮乏その極に達し、それに加ふるに苛斂極まりなき領主の誅求と、貪婪飽くことなき官吏の搾取により、只黙々として牛馬の如く働くか、或は逃亡するもの、暴徒となるもの、盜賊と化するもの、他國に走つて莊戸客戶、果ては奴隸となるものさへ續出するに至つたのである。

かゝる時代に於ける淨土教の信仰が、彼等農民に取つて如何やうに受入れられたか。太原を中心として、太原汾水晉陽三縣は、七歳已上悉く念佛を稱ふるに至つたと云ふは、一に道綽等の教化の力によるものであり、又少康が睦州(湖北省)一州悉く念佛の聲に満たしめたと云ふが如き(宋高僧傳二五)その他、善導、法照等何れもかゝる人々に對する淨土信仰に、熱烈なる力を注いだものであり、更に當時村落を巡廻して、村民に對して教を説く遊行僧・化俗僧なるものも居たからして、^⑦かゝることに於いて、彼等農民にはこの彌陀の信仰が相當深く弘まつたものと思はれる。これは淨土教が無知文盲なる人々を對象とせる、最も簡易にして、最も高尚なる法なると共に、更には彼等現在の窮乏せる生活に光を失ひ、只管自己の幸福を、己れが自由なる天地を、彼岸の世界に見出さんとして、厭離穢土、欣求淨土のこ

の思想に絶つたものであらうと思はれる。實に彌陀の教こそ、かゝる人々に取つては、全く天來の福音と感じたことであらう。かくして現世に望を失へる彼等は、この天來の福音とも云ふべき、阿彌陀佛、西方淨土の往生に、己れの希望と幸福とを見出し、黙々として封建社會下の重壓に堪へ忍んだことであらう。これが彼等農民の精神生活の唯一の慰安であり、時に開かるゝ遊行僧の説教は、彼等に取つて最も待ちこがるゝ安息でもあつたであらう。

① 塚本善隆氏著『唐中期の淨土教』——特に法照禪師の研究」參照。

② 長安城内の諸寺に地獄變相等のあつたことは、一例を張彦遠の『歷代名畫記』によれば、慈恩寺に張孝師の地獄變の壁畫があり、寶刹寺には佛殿に涅槃變相、西廊に地獄變相があり、興唐寺には吳道子の金剛經變、西方變があり、雲花寺には趙武端の淨土變があり、化度寺には盧稜伽の地獄變があり、福先寺には各々張孝師、吳道玄の地獄變があり、敬愛寺には大殿の西壁に趙武端の西方佛會及び劉阿祖の十六觀及び閻羅王變があり、東西兩壁に各々西方彌勒變がある。地方の寺院も同様で一例を舉げれば圓仁は登州(山東省蓬萊縣)の開元寺に於いて西方淨土及び補陀落淨土の壁畫を見て居り(入唐求法巡禮行記二)、涼州(甘肅省武威縣)の大雲寺には淨土變、地獄變其他の壁畫あることが見えて居る。(金石萃編五九)

③ 段成式の西陽雜俎續集第五寺塔記上に、長安の常樂坊趙景公寺の壁を述べて云く

南中三門裏東壁上、吳道玄白畫地獄變、筆力勁怒、變狀陰怪、都之不覺毛戴、吳畫中得意處三階院西廊下、范長壽畫西方變及十六對事實池、池尤妙絕、諦視之覺水入深

と云ふが如きは、當時の地獄變、淨土變が如何に巧であつたか、如何に人々の心に深き感銘を與へたかを知ることが出来る。

④ 善導の『般舟讚』に於ける地獄及び淨土の巧なる文學的描寫、慈愍の『般舟三昧讚』、法照の『五會法事讚』のこれらに對する讚歌、更には詳細を缺くも益州(四川省成都)の惠覺が農を集めて地獄經を講じて居たと云ふ如きその一例である。

⑤ 山崎宏氏の「隋唐時代に於ける義邑及び法社に就て」(史潮三ノ二)參照。

唐代淨土教徒の精神生活(道端)

⑥ 鈴木俊氏の「土地制度及び財政」(世界歴史大系五所收)参照。

⑦ 段安節の『樂府雜錄』、任蕃の『夢遊錄』、李肇の『國史補』其他にこれに關する史料あり、このことに關しては何れ後に發表したいと思ふ。

六 結 語

以上唐代に於ける淨土教徒の精神生活に就いて、特にそれが要素をなせる彼等の信仰内容に就いて論究したのであるが、その結果は、今日我國淨土教に於けるが如き觀念を以て眺めるとは大いに異り、彼等西方願生者と稱し乍ら、其の行業並びにその内容は頗る融通性のものであり、又漠然たるものが多かつたのである。天台にあり乍ら、華嚴を研究し乍ら、法相唯識の高僧であり乍ら、其他淨土教に關係なき學者僧徒であり乍ら、その願生せんとする處は彌陀淨土にあつたりするのはいゝとしても、その信仰内容が彌勒か彌陀か、臨終の最後迄判然せざるが如き、頗る漠然たる曖昧模糊たる信仰を有するが如きものもあつた。

從つて又それに對する往生の行業も頗る他種他様に互つて居たことは上述の如くである。併し乍ら唐代の淨土教徒がこれに満足し、これによつて己れの生活を支へんしたことも事實であらう。尙この題目に就いて論述せねばならぬことは、彼等佛教徒の信仰の表現である。佛教徒がこの信仰に裏付けられて行はれたる色々の行事である。彼等淨土教徒と社會との交渉である。文藝文面に、建築方面に、繪畫方面に、其他あらゆる文化的方面に關して、如何なる影響があつたかであるが、これ等は又後の研究に讓ることゝして、一應こゝに擱筆することゝする。